

佳作

人が人として人を大切にすること

県立誠和福祉高校 3年

木川田 愛花

「人を選んでからかっていますか。もう一度自分達の行動を考え直してください。」と中学生の頃、美術の授業中にクラスメイト全員に向けて教師が放った言葉が今でも鮮明に覚えている。からかいというのは特別支援学級に居たクラスメイト2名を相合傘に書いて周りがひやかすというもので中学生からしてみれば極めてめんどろ、だるいものだった。当事者の2人は居心地の悪そうにうつむき、小声で「やめてよ」とつぶやくだけでからかっている人間からすれば「多少ふざけても何も言い返さない存在」だったのだろう。

このような障害を持っている人をいじりの対象にしたり、省きの対象にするのは学校という閉鎖的空間のみならず社会性を身につけたはずの大人達が沢山いる世の中でも起きている。例えば駅や電車で落ち着きがなく腕を動かしていたり、独り言が多い人などを見ると動画を撮ってSNSに上げたりする人間もいる。

私からすると障害のある人を笑い者にして一種の娯楽として消費しているよう見えて胸糞が悪い。確かに電車を待っている間に隣にいる人が落ち着きなくモゾモゾ動いていたら気になるし、電車の中で独り言が大きい人を見たら警戒するのも分かる。だが、それだけで動画を撮ってSNSに上げようとは思わない。

あくまで、私の考えだが、差別的になってしまう原因は主に2つあると思っている。

一つ目は学生の頃から支援学級と普通学級に別になって関わり方がわからないまま社会に出てしまうこと。二つ目は関わり方を知らないからこそ偏見が深まりプライバシーを守らなくなること。これらのことが絡まり悪意のある差別が起こると思った。

言葉が悪くなってしまうが、どこかで自分よりも劣っていて格下だと思っている人もいるだろう。どうしても「障害」というものは「何かができない」「何かが欠けている」と思ってしまう。実際、私は支援学級に居た子のひらがなだらけの掲示物や極端に短い作文、感想文を見て文章を書くのが苦手なんだなと思った。しかし、できないことだらけでなく学校の畑にさつまいもを植えるなど手に職をつけるトレーニングをしていた彼女は、できることが沢山あった。差別を無くしていくには「できない」ことより「できる」に目を向けお互いに敬うことが大事だと思う。

中学校の頃の支援学級に居る子は大人しいからいじりの対象になり、社会にいる障害のある人は根拠のない偏見に苦しむ。私はこれまで「障害」という文字を多くだしてきたが、大事なのではなく、「人が人として人を大事にする」ことだと思う。障害の有無に関わらず、同じ人として産まれてきて育った者同士尊敬し合いながら日々を過ごすことが差別を無くすことに繋がると思う。

支援学級に居た彼女とは朝の電車がよく被り友達と仲良くしているところをよく見る。中学生の頃は無表情で本当に仲の良い友人2人ぐらいにしか笑顔を見せなかったのだが、今楽しそうにしている姿を見ると良かったねと思いつつ中学校に居づらかったのではないかと申し訳なくなる。

普段優しい先生の「人を選んでいませんか。」には全身を凍らすほどの冷たさがあり、今でも忘れられない。私はこの言葉を肝に銘じて人を見て態度を変えることがないようにしたい。将来は全体

の奉仕者である公務員になりたいと思っている。どんな人が目の前にいても、人として人を大事にしたい。自分がされて嫌だと思ふことはしないという簡単なものから始めていこうと思う。いじりなど差別的なものは意識の問題で無くしていくには時間が必要だけれども、自分の身の周りに居る人を大切にしていけば数十年後には今よりも少しはましになると思う。